平和を希求する心を育てる取組

報告年月日　　令和３年３月１８日
都市名・国　　北海道釧路市・日本

取組の名称	平和コンクール
実施主体 （該当項目に✔）	□学校　☑自治体　□ＮＧＯ　□複合（　　）
テーマ・目的	テーマ：平和　目的：「核兵器廃絶平和都市宣言」の啓発を図るため
対象者 （年齢･学年、人数等）	市内在住の小・中学生、市内所在の高校に通学する高校生
実施場所	絵画作品展：市内コミュニティセンター等４会場 表彰式：釧路市役所
実施期間	作品募集期間：令和２年４月１日～８月７日（４か月間） （小学生の平和絵画は平成１３年開始、中学生の平和図書読書感想文は昭和６３年開始、高校生の平和の主張は平成１４年開始。） ※募集期間は毎年４月１日～５月末日だが、令和２年度は新型コロナウイルス感染拡大防止による臨時休校のため募集期間を６月１日締切から８月７日締切に延期。 絵画作品展開催期間：令和２年９月１７日～１０月７日及び令和２年１０月２１日～１０月２７日（２５日間） 表彰式：令和２年度は新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止。

取組の概要

「核兵器廃絶平和都市宣言」の啓発を図るため、市内在住の小学生を対象に小学生が思い描く「平和な暮らし」の絵画を、市内在住の中学生を対象に平和関連図書の読書感想文を、市内所在高校に通学する高校生を対象に「平和」について述べてもらう論文を、それぞれ募集しています。

●絵画（小学生）
用紙の規格は四ツ切り（４０㎝ ×５５㎝・縦横自由）。彩色の方法は自由とし、画材についてもクレヨン・パステル・水彩等いずれも可。

●読書感想文（中学生）、平和の主張（高校生）
４００字詰原稿用紙３～５枚程度にまとめて提出。

・募集締切後、審査員による審査をし、入賞作品については作品集に掲載。
・入賞者は表彰式にて釧路市平和都市推進委員会委員長（市長）等より表彰（令和２年度は中止）。
・絵画の最優秀賞作品は各種資料の表紙絵等として使用。
・読書感想文の最優秀賞受賞生徒は３年に１度の被爆地訪問市民代表団の団員として広島市または長崎市に派遣。また釧路市民戦災死没者慰霊式並びに平和祈念式にて平和の誓いを朗読（令和２年度は規模縮小開催のため未実施）。
・主張の最優秀賞受賞生徒は釧路市民戦災死没者慰霊式並びに平和祈念式において作品を発表（令和２年度は規模縮小開催のため未実施）。
・絵画については、全作品を作品展にて展示。

参加者の反応

各作品より、平和の尊さや大切さについて真摯に考え、取り組んでいる姿が伺えています。

成果 今年度は絵画２３７点、読書感想文１２６点、主張４４１点の応募がありました。前年度比、絵画と主張は応募数が増加しましたが、読書感想文は微減でした。（令和元年度は絵画１７７点、読書感想文１３４点、主張３７点）
課題
取組で使用した素材について（図書、映像、パワーポイントなど。内容をわかりやすく簡潔に記入してください。） ・入賞作品集を作成、発行
上記素材の共有の可否（取組で使用した素材を、平和首長会議の WEB サイトに掲載し、他都市と共有することに、著作権その他の問題がないか、次からお選び下さい。） ■掲載可能（素材を添付してください）　　□掲載不可　　□不明

※　画像等の資料がある場合は別ファイルで提出してください。

第２０回平和絵画コンクール作品展

令和２年度 平和コンクール 作品募集

小学生対象

第２０回 平和絵画コンクール

１.応募資格
釧路市内に在住する小学生

２.テ ー マ
小学生が思い描く
「平和な暮らし」

３.規　　格
四つ切り（40cm×55cm
縦横自由）
彩色の方法は自由。画材についてもクレヨン・パステル・水彩等いずれでもよい

中学生対象

第３３回 平和図書読書感想文コンクール

1.応募資格
釧路市内に在住する中学生

２.課題図書
世界唯一の被爆地、広島・長崎の原爆を主題とした図書（小説・随筆・詩集・ルポルタージュ等）

３.応募規定
400 字詰原稿用紙
3～５枚程度

高校生対象

第１９回 平和の主張コンクール

1.応募資格
釧路市内に所在する高校に通う高校生

２.テーマ
平和について思うこと、主張したいこと

３.応募規定
400 字詰原稿用紙
3～５枚程度

☆掲載の絵は、第 19 回平和絵画コンクール最優秀賞を受賞しました湖畔小３年阿部晃大さんの作品と優秀賞を受賞されました皆様の作品です。

募集期間　令和2年4月1日（水）～6月1日（月）

応募方法：学校単位で事務局へ提出
※詳細につきましては、各コンクールの実施要項をご覧ください。

要項や応募票は
釧路市 HP からもダウンロードできます。

【事務局】〒085-8505
釧路市黒金町７丁目５番地　釧路市役所市民生活課生活安全担当内
釧路市平和都市推進委員会事務局　TEL　0154-31-4590

主催：釧路市平和都市推進委員会　共催：釧路市
後援：釧路市議会 釧路市教育委員会 釧路市連合町内会 連合北海道釧路地区連合会 釧路青年会議所 釧路ユネスコ協会

令和２年度作品集

平和コンクール

第２０回平和絵画コンクール最優秀賞　釧路市立湖畔小学校４年 門間　大明　さん

釧路市平和都市推進委員会

第２０回平和絵画コンクール
最優秀賞（釧路市平和都市推進委員会委員長賞）湖畔小学校４年　門間（もんま）　大明（ひろあき）

第２０回平和絵画コンクール
優秀賞（釧路市議会議長賞）清明小学校４年　池端（いけはた）　和々子（ななこ）

第３３回平和図書読書感想文コンクール
最優秀賞（釧路市平和都市推進委員会委員長賞）

燃える広島の地で

釧路市立景雲中学校　２年　髙山（たかやま）　果恋（かれん）

終戦という「平和」のため、彼女たちは命という犠牲をなぜ払わなければいけなかったのか。原爆により、轟々と燃えさかる広島の地で被爆し、亡くなった級友の事を想いつづった関千枝子さんの著書『広島第二県女二年西組　原爆で死んだ級友たち』を一ページ一ページめくる度に私はこの気持ちが強く実を結んでいるのを感じた。ましてや、戦争と正面から向き合う彼女たちは何を求めていたのだろう。

一九四五年八月六日八時、二年西組の生徒たちは建物疎開作業として野外で瓦運びを行っていた。現在の中学二年生にあたる彼女らは「ハイ」「ハイ」と持ち前の元気なかけ声と共に迅速なスピードで瓦を積み上げていく。積み上げた瓦を背に笑顔を浮かべている彼女たちの姿が浮び、このまま時が過ぎて欲しいと私は強く願った。何事も無かったかのように。私はページをめくり、次の行へ恐る恐る目を走らせた。

「あっＢが・・・」彼女たちの頭上にはＢ２９から放たれたパラシュートがゆらゆらと落下していた。パラシュートには私たちがよく知っている原子爆弾がついていた。優雅に落ちてくる爆弾には自責の念など私には感じられない。そして、
「八時十五分。閃光と轟音。広島は死の街となった。」

爆風に吹き飛ばされた彼女たちは皆、大火傷をおっていた。火の海と化した広島の地で身体からむけおちたどろどろの皮膚を引きずり、顔を血で染めた彼女たちの足は慌てることなく火の無い方へ向かっている。変わり果てた彼女たちの姿は痛々しく、それ故に戦争に対する闘志で燃えていたのだろう。そこから、彼女たちは小集団となり病院や学校へと向かう。しかし、先程まで明るかった広島は真暗闇になり視界がきかなく、一.一キロメートルという僅かな距離で被爆した彼女たちは、重篤のため途中で力尽きた者、自力で病院や学校へたどり着いた者など様々であった。そして、この日を境に一人を除き、全員が二週間以内に昏睡に陥り他界した。この日、作業に参加せず生き残った生徒は関さんを含め六人のみ。広島第二県女二年西組は軽傷のため生き残った一人を含め七人となった。

惨い形でこの世を去った彼女たちは最後に何を思ったのか。ずっと信じて疑わなかった日本を初めて憎いと思ったのだろうか。だが、私の考えはすぐに打ち砕かれた。ほぼ昏睡状態に陥った彼女たちの大半が国歌を歌い、“日本は必ず勝つ。負けはしない。”と信じ死んでいったという。まさしく彼女たちが求めたものは戦争に対しての自由ではなく、戦争に対しての勝利だと結論づけた。私と同じ中学二年生の女の子が亡くなる間際でこのようなことを思っていたのか。戦争から七十五年後の今を生きる私にとって彼女たちの存在は

一生忘れないだろう。

彼女たちが生きた日々は決して「平和」であったとは言えない。それでも彼女たちは戦争に勇敢に立ち向い、原爆という≪人間につくられたもの≫により亡くなった。地震などの自然災害ではなく≪人間につくられたもの≫によって。私はこの事実に気づいた時、思わず叫びたくなった。「平和」の代償を負わせたのは誰かと。

彼女たちと比べ、私たちはどうだろう。今の「平和」な時代に甘えきってはいないか。技術が発達し、現代では十分なほど何でも可能だ。でも、私はこの本を反芻する度にこのままでは駄目ではないか、亡くなった命を無駄にしないかと思う。そこにはいつも

「戦争をよく知ってもらいたい。未来につなげて欲しい。」

という関さんの願望があった。私は関さんの思いがつまったバトンを受け取った。私は受け取ったバトンを未来へつなげたい。つなげた先には「理想の平和」があるのではないだろうか。

第１９回平和の主張コンクール
最優秀賞（釧路市平和都市推進委員会委員長賞）

時代とともに移りゆく平和

北海道釧路湖陵高等学校　３年　樋渡（ひわたり）　羽奏（わかな）

平和とはなんだ。小学生低学年の頃からこの問いの答えを探し求めてきた。その過程で私が出会った本や人、訪れた被爆地の広島と長崎は、私の平和に対する思いを大きく変えた。戦争体験談を聞いたり、被爆したものを目の当たりにし、様々な視点で思いを巡らせてきたつもりだ。

さて、現代の社会は平和といえるだろうか。核の廃絶が進んでいないことはさることながら、内戦やテロの武力による危険にさらされている人もいる。飢えに苦しんでいる人もいる。加えて、行き届いた十分な医療や安全な生活環境が整備されず、命を落とす人さえいるのが現状だ。平和は何らかの脅威や苦しみが完全に排除されて初めて成立するものではないのか。

今年の春、命の大切さを痛感させられた。新型コロナウイルスの流行のことである。日本ではまだ感染が確認されていなかったころ、他国で流行しているという報道に接しても、「対岸の火事」のようにしか思わなかった人がほとんどだった。「自分だけは大丈夫」という考えが多くの人命を奪った。協調の欠如から生まれた悲劇だろう。

一方で「共助」の精神がもたらした人間愛を新聞の投書で目にした。「バスに乗車していると、その中でただ一人、マスクを着けていない高齢の女性がいた。そこで自分が持っていた三枚のマスクをあげたところその女性は涙を流して喜んでいた。」マスク不足が深刻化していたご時世で、見ず知らずの人に譲るには大変な「勇気」を必要としたと思う。それでも自分の身に対する感染の懸念よりも善意が勝さったのだろう。心の強さとその勇気に震撼した。人間の神髄に触れたような気がした。それと同時に、本来動物や人間には、助け合おうとする本能が備わっている。だから、手を差し伸べられた瞬間、「頑張ろう」という意欲が沸き、明日への活力にもつながっていくとも思った。このスパイラルこそが、社会的な共助の輪を広げていく一つのルートなのではないだろうか。

このような篤行も少なからずある。だが一方で核の開発は今も尚進んでいる。いくら声を上げても開発が中止される確率はゼロに等しいということが悲しくてならない。核開発推進派が唱える核抑止論があることはわかっている。しかし、本当にこの理論は通用するのだろうか。私はしないと思う。自国の安全や国益が危ぶまれたとき、皆、平常心を保つことができなくなると考えるからだ。取り決め通りに事を進められないことも十分にある。貿易摩擦や外交上の意見の相違により、その関係に亀裂が入ることも珍しくはない。歩み寄ったかと思えば急にけん制し合う。核開発すら、国同士での競争化が激化している側面

も否めない。核兵器がなくならない限り、核戦争の可能性は十二分にあると考える。戦争の最大の抑止力は核の保有ではなく、核の完全なる廃絶だ。

今からほんの七十五年前、日本に四日間で二度も原爆が投下され、何十万という尊い命が失われたという過去は覆すことができない。いくら愚かな行為を恥じてもその事実は変えられない。失われた命も戻ってこない。現代日本のように「戦争」という同じ過ちを後悔するような未来は望まない。むろん、一般国民に核開発を阻止することができるような力もない。しかし、こうして今、生命を授けられている私たちが、あの悲惨な戦禍を見聞し、語り継いでいくことで、世論の大半を反戦争派へと導いていくことができるかもしれない。

しかし、現実は戦争体験者の減少や高齢化により、当時の生の声を聞く機会が失われつつある。より一層、与えられる機会を可能な限り無駄にせぬ意識を持つ必要がある。その際には、語り部たちは常に戦争を想起する度にその心を痛めていることも胸に止めておかなくてはならない。自分たちが味わった血の滲むような辛い思いが脳裏をよぎり、その振動さえもが聞き手に伝わるほどだったからだ。今を生きる私たちには同じ思いをさせたくはない、という強い意思があるからこそ、伝承してくださっている。その想いに報いるためにも、私たちは一つ一つの言葉を深く受け止め、心に刻み、未来へそのバトンを繋いでいかなくてはならない。それは、我々に課された責務でもある。

私にとって、釧路市が主催するこのコンクールは、戦争の忌まわしさと恒久平和の尊さ、そして、それを語り継ぐ義務を考える一つのきっかけだった。残念ながら応募の機会は今年で最後となってしまった。しかし、世界中の人が「平和な世の中だ」と思い続けられることの重要性はいくら歳を重ねても心に止めておきたいと考えている。むしろ学びを深めていきたい。たくさんの人たちによって日本はもちろん、世界にも未来へ向けてこのバトンが受け継がれていくことを切に願っていく。

未来の明暗を分けるのは私たちだからだ。